やうなすさまじい責任を感ずるのである。而もそれが、何事もないやうな靜かなる一言によつて育てられて行く事を思ふ時、こうしてはおられぬとさへ思ふ。保姆は子等と共に驚き、子等と共に追ひ、そして子等と共に育たねばならぬ。

後に續く子等へ

附屬幼稚園　志村貞子

昭和十六年十二月八日。

畏くも米英に對する宣戰の大詔が煥發された。ハワイ眞珠灣空襲の大戰果がラジオを通じて刻々に報ぜられた。あの日、私は幼稚園のラジオの前で幼兒達と共に、大詔を拜承し緒戰の大戰果に限りない感激を味はつたのである。その後早くも二ヶ年、三度同じ十二月八日を迎へその同じラジオの前に十一時五十九分の時報を合圖に幼兒達と共に心からの祈念を捧げ決戰の大東亞戰爭第三年を迎へたのはつひ先達のことである。幼いながら日本の子供である。祈念につゝく君が代奏樂の間も身じろぎもせず咳もせず小さな頭を垂れて謹しみ祈る子供達であつた。私は十年、十五年の後にこの幼兒達の雙肩にかゝる重い務を思ひ、心身共に健かに、立派に皇國の御楯と生ひ立つやうにとあはせ祈らずには居られなかつたのである。嘗て滿洲事變、支那事變と皇國を賭しての大きな歩みの時、「天皇の御楯となれよ」との母の、師の國民の祈りの中に、剛く直く生ひ立つて行つた若人達が、今この大東亞戰爭にその若き命を捧げてゐる。このことを思ふ時、昭和十九年の榮ある年を迎へた子供達に祈ることは只一つ、この親に、この兄に立派に續けといふことである。それにつけても、この親や兄達がその尊い血肉を捧げてゐるこの戰を、そしてまたその親や兄のこの祈りの心を如何に子供達に傳へようか。子供は子供なりに、この大戰爭を、この大人達の心を現實の中に活き活きと感じてゐるに違ひないのであるが、私共は母とし師とし、國民の一人として、生けるしるしある大御代に生を享けたる喜びと、後に續く者を恃んで散華せられた幾多英靈の心とを次の世代に傳へずにはゐられない心持である。折にふれて私共は子供達にこの大東亞戰爭を語りきかせる。戰を語る。これは頗る嚴肅なことである。戰は言葉でのみ語らるべきではない。英靈の御寫眞に、また征途につく皇軍機の勇姿に舳艫相銜む帝國艦隊の威容に、また私共日常の行の中にこそ語らるべきものであらう、故に言葉を以て語る時にはその一字にも勇士の血肉が盛られ、一句にも英靈の魂魄が籠る。次々に發表される戰果の報道、その簡潔なる字句の中に幾多の英靈がましますのだ。私共はそこに炸裂する砲彈をきゝ、「天皇陛下萬歲」の絶唱が胸をうつ。こゝに神々しくも行ぜられたる昭和聖代の神話をきくのである。この神話は私の口を通して修飾せらるべくあまりに生々しく尊い。ただ簡潔な字句ににじむ英魂の前にひれ伏す氣持を語るのである。私がこの戰爭を子供達に語るに多く、報道をそのまゝ以てするのも話として首尾整ふべき餘裕がない事を

別として、このやうな心持からに他ならない。戰爭の話として、このやうな話し方は批判研究さるべき餘地の十分にあることゝ思ふが、私の心持を述べ且、子供達に話した友永海軍中佐、菅野海軍飛行特務中尉の武勳を謹んで記し、大方の御指導を仰ぐ次第である。なほこの二軍神の傳記等を精しく知ることは話す者として希んでやまないところであるがその折を得ないまゝ、當時新聞紙上に報ぜられたところによつて謹み記したものである、ことを申上げる。

皆さんおめでたう。昭和十九年のお正月を迎へて皇室の御榮のいよいよめでたくいらせられますこと、大東亞戰爭のいよいよ捷ちすゝんでゐますことの有難き嬉しさを御一所に心からお祝ひ致しませう。それから皆さんが一つ年をとつて大きくなられて、國民學校へあがる日が近くなつたことをお喜びします。それは皆さんが、天子樣のお役に立つ日が一つ近くなつたからでもあります。

皆さんはこの四月に國民學校の一年生になられるのですが、今から十二年前、滿洲事變が始まつた頃、丁度今の皆さんと同じ位だつた方達は今、陸海軍の學校の生徒や少年兵になつて御奉公に勵んで居られます。同じ頃五、六年のお兄樣だつた方々は皆今第一線で勇しく戰つてゐられるのです。このお兄樣方の後につゞいて米英を撃滅する皆さんに、今第一線に勇しく戰はれ、靖國の神樣になられた勇士の立派なお働きをお話しませう。

皆さんは、昭和十六年十二月八日、大東亞戰爭が始まつたあの日に、ハワイ眞珠灣の奥深く海の中を潛航して米國の太平洋艦隊をうち沈めた特殊潛航艇の九人の軍神のお話、同じ日に空から眞珠灣を攻撃し、大戰果をあげられた海軍航空部隊の四十九勇士のこと、それから十七年の五月末に、シドニー港と、マダガスカル島のヂエゴ・スワレスを攻撃した第二次特別攻撃隊の十人の勇士の勇しいお働きを知つてゐるでせう、これらの軍神につゞいて、特別に立派なお働きをなさつた海軍の三十六勇士のお話が去年の十二月四日に海軍省から發表されました。この方々は、天皇陛下の特別の思召で二階級進級といふ譽れをいたゞいたのです、この勇士の中で海軍中佐になられた友永丈市大尉と、海軍飛行特務中尉になられた菅野兼藏兵曹長の勇ましいお働きをお話しませう。

友永中佐は昭和十七年の六月五日、東太平洋方面の作戰の時に、母艦飛行機隊の指揮官として敵の飛行機の基地を攻撃し、敵を粉微塵に撃ち破りました。その上に向つてきた敵機と勇しく戰つて四十五機を撃ち墜すといふ大戰果をあげました。この時の激しい戰の間に中佐の搭つてゐられた飛行機も敵の彈をうけて燃料のガソリンを入れる大事なタンクをやられて母艦に歸つてきました。この時丁度、敵航空母艦のゐるところがわかり、母艦に歸つた中佐にすぐまた敵航空母艦を攻撃せよの命令が下りました。中佐の飛行機はこの時まだ先の戰でやられた燃料槽がすつかりなほつてゐませんでした。敵航空母艦は一刻も早く撃ち沈めなければなりません。今はもう燃料槽をなほしてゐる暇はないのです。燃料槽をやられてゐる爲に中佐の飛行機は大切なガソリンを澤山に入れてゆくことは出來ません一度母艦を飛び立つて、敵をうち沈めてまた

歸つてくる間、飛びつゞけるだけの燃料を入れて行く事が出來ないのです。中佐はそれをよく知つてゐました。一度飛び立つたら燃料が足りなくて二度とこの艦に歸つては來られない事を。けれども中佐はすぐさま部下の飛行機隊を率ゐて攻擊に飛び立ちました。その傷んだ燃料の足りない飛行機にのつて。敵は中佐の率ゐる我が攻擊機隊に氣がつくと死物狂ひで防禦砲火を擊ち出しました。澤山の火花が我が攻擊隊の廻りに飛び散ります。敵の戰鬪機隊もたち向つて來ました。けれども中佐とそれにつゞく勇ましい飛行機隊はこれをものともせず忽ちに敵機を擊ち墜し敵艦隊めがけて突込みました。敵彈の中をまつしぐらに敵艦近く舞ひ下つて次々とねらひ定めて雷擊を行ひました。敵をたほさずにはおかぬ勇士の心をこめた魚雷です、どうしてこれが命中せずにをりませう。大水柱を吹き上げて忽ちに敵大型航空母艦一隻は擊沈しました。その上大型巡洋艦一隻も擊ち破り、敵機十三機を擊ち墜すといふ大戰果をあげたのであります。この戰に中佐の飛行機は雷擊の前に、敵が夢中で擊ち出す彈にあたつて火を吐き出してしまひましたが、中佐は少しもくぢけず、正しくねらひ定めて雷擊をし終ると火を吐く飛行機を敵航空母艦の艦橋めがけてまつしぐらにつゝこみ、勇ましい戰死を遂げられたのであります。

菅野中尉は昭和十七年の五月始めに行はれた珊瑚海海戰に索敵機指揮官としてゆかれました。索敵機といふのは最前線に出て敵を見つけ出し、その敵の樣子等を精しくしらべて出來るだけ早く味方に知らせるといふ大變に大切なそして難しいお仕事をする飛行機なのです、菅野中尉はこの時も最前線に飛んで我軍にかくれてそつと進んでゐる敵の大艦隊を見つけ出しました。敵は澤山の戰鬪機を飛ばせて艦隊をしつかりとまもり、一生懸命に見張りをしてゐます。中尉はこの澤山の敵戰鬪機の見張りの中を苦心して敵艦隊の樣子をさぐりました。そしていろいろと敵を攻擊するに役立つ大切な知らせを味方に知らせて戻つてまゐりますとその途中で今、中尉からの知らせをうけて、翼をそろへて敵艦隊を攻擊にゆく味方の攻擊飛行機隊に出會つたのです。中尉はどんなに嬉しく思はれたでせう、自分のしらべたことがこの攻擊の大切なお役に立つのですから。この時中尉の飛行機は長い間の索敵の爲に燃料をつかつてもう少ししか殘つてゐませんでした。そのまゝ攻擊機隊に頼んで戻れば味方のところに歸りつく事が出來ますが、今、また敵艦隊のところまで引き返せば燃料がなくなつてどうしても味方の艦に歸りつくことは出來ないのです。そのまゝ眞直に戻れば生きる事が出來、敵艦隊の方へと引き返し進めば死ぬのです。生きるか死ぬかの境目でした。けれどもこの時、中尉には、はつきりときまつてゐたのです。味方のところへ歸るか敵の方へ進んで征くか。中尉は機首をむけ直しました。今歸つて來たばかりの敵艦隊の方に向けたのです。日の丸の翼をはつて、中尉は攻擊機隊の先に立つて敵艦隊の方へ案内して飛びつゞけました。今敵の樣子をよくしらべてきた中尉には敵戰鬪機の群がどの邊で見張つてゐるかよくわかつてゐます。ですからそれに出會はないやうに上手に味方の攻擊機隊を案内して飛びました。中尉の上手な案内があつたお陰で、味方は敵機の爲に少しも疵をうけることなく元氣

一ぱい、揃つて敵艦隊の上に襲ひかゝつたのです。勇しい我攻擊機隊です。大きな水柱がそこゝにあがりました。この戰で、「レキシントン」型と「ヨークタウン型」の航空母艦を一隻づゝ、合せて二隻擊ち沈め、「ノースカロライナ型」戰艦一隻と巡洋艦一隻を擊ち破るといふ大戰果をあげたのでありますが、この大戰果のもとゝなつた大切なお役目を果された中尉は燃料がなくなつてたうたう勇ましい自爆を遂げられたのであります。

駈足の取扱ひ

附屬幼稚園

福田靜子

空に陸に海に一瞬毎にあがる皇軍の輝かしい戰果が發表されてゆくとき、大空へ、大陸へ、大海へ子供達の身心は伸びてゆきます。

鍛錬、鍛錬！　燃料節約に備へて、自給自足。外からの補給はなくても、體内より溢れる熱力でこの冬を過さうではありませんか。

駈足と申しましても、それは子供達の日常生活の中には最も多く含まれた運動であつて、身體的效果も大きいものであります。

駈けるのですから、主として働くのは脚部でありますが、臂、肩帶部、腰部、胸部等、殆んど全身の發達を助ける事になります。内臟や肺を強くする事は申すまでもありません。その爲に、準備運動として樣々な運動の前にもとり入れられて居ります。

駈足訓練

駈足訓練は既に多くの幼稚園で行はれてゐることゝ思ひます。全園揃つて朝の集りの後で、又は晝食の前に一齊に、或ひはお歸へりの前に一同集つて、園舍の周圍を廻るとか、園庭を何回も廻るとか、樣々な方法で取扱はれてゐると思ひます。何れも非常に結構なことであります。

全體で行ふ場合には步調が揃ふことが大切でせう。前後の間隔が適當に保たれてゐなければなりません。各々、足尖が概ね走る方向にむいてゐること、步長が相當大であること、隨つて最初踵より地面に觸れること、臂は腰邊で略ゝ直角に屈げられ、前方に振れた際には多少小さく、後方に振れた際には幾らか大きくなること、全體としては彈性的に伸び〳〵と大きく輕快に。と云つた注意があります。小跨でチョコチョコ走つたり、地面を引摺るやうな走り方はよいものでありませんし、上體が、立過ぎたり、前に傾きすぎたりするのもよくありません。

列數は時々變化させて、一列から四列位まで作つてみます、横の列が增せばそれだけお互ひに注意し、前の人を押したり、お隣りの人にぶつかつたりしない樣氣をつけませう。輕快な駈足の音樂や、冴えた笛の音、或は皆の一、二、一、二、の呼稱にあはせて元氣よく駈足行進が行はれます。

こう云ふ樣に團體で繼つて駈足をする場合、體力に相應しい距離や時間が考へられなければなりません。最長三分間を越えないのが普通ではないかと思ひます。それも